

人とともに 地域とともに 島根大学

*shimadai



2025.12 Vol.62



特集
1

島根大学と島根県立大学

大学間連携で地方創生を目指す 人々たち

撮影地／島根大学医学部 医の庭

*shimadai



Vol.62

2025年12月発行 編集・発行／島根大学
〒690-8504 松江市西川津町1060 TEL 0852-32-6603 FAX 0852-32-6630 <https://www.shimane-u.ac.jp/>

Forum on Ancient Izumo Culture SEIDOKI & IZUMO

古代出雲 文化フォーラムXII 青銅器の出雲

参加費
無料

定員／最大250名
(スクール形式)



【主催】島根大学【後援】島根県・島根県教育委員会・松江市・雲南市・日鏡テクノサービス株式会社

令和8年
3月7日

開演時間 13:00～17:00 開場 12:00～
島根大学 大学ホール
(島根県松江市西川津町1060)

今回のフォーラムでは、古代出雲の文化を代表する「青銅器（せいどうき）」に注目します。青銅器は弥生時代に日本に入ってきて、大きく発展し、古墳時代には日本中に広がりました。この流れは、日本列島に古代国家ができていく過程を考えるうえでとても重要で、これまでもいろいろな議論がされてきました。

今回は、青銅器がどのように広まり、歴史上どんな役割を果たしたのかを、東アジア全体の広い視点と、弥生時代から古墳時代までの長い時間の流れをふまえて、最新の考古学や分析技術を使って考えていきます。

① 神原神社古墳出土景初三年銘三角縁神獣鏡 ② 加茂岩倉遺跡出土銅鐙、いずれも島根県雲南市（文化庁保管）

下記のいずれかの方法でお申し込みください。令和8年2月上旬ごろ入場整理券を郵送いたします。

応募締切 令和8年1月30日(金) (当日消印有効。ただし受付は先着順となりますので、定員になり次第締め切ります。)

ハガキ・FAXでのお申込み

申込者氏名、住所、年齢、電話番号、同伴者数、卒業生の方は卒業年度と学部をご記入の上、下記宛先までお送りください。

〒690-8504 島根県松江市西川津町1060

宛先 島根大学企画部企画広報課

「古代出雲文化フォーラムXII」宛

FAX番号 0852-32-6630

ホームページでのお申込み

<https://www.shimane-u.ac.jp/>

古代出雲文化フォーラムXII



ご応募いただいた個人情報（氏名及び住所等）は「古代出雲文化フォーラム」の案内のみ使用致します。フォーラム当日は撮影が入る場合があります。そのため、TV・新聞・インターネット等に映り込み、掲載・放映される可能性がございますので、予めご理解の上、お申し込みください。

お問い合わせ



島根大学企画部企画広報課 TEL.0852-32-6603
〒690-8504 島根県松江市西川津町1060 forum@office.shimane-u.ac.jp



島根県立大学 学長 山下 一也 島根大学 学長 大谷 浩

撮影協力: 出雲文化伝承館

島根の未来を創る

島根県立大学との連携で

大谷 島根県は「課題先進地域」とも呼ばれ、人口減少・高齢化、人手不足による産業の停滞など、地域の持続可能性への懸念が年々高まっています。山下「18歳人口の減少」が今後10年ほどさらに加速することは、データからも明らかで、人口減少に伴う医療、看護、保育士の人手不足と地域偏在の問題も深刻です。

大谷 地域にとって大学の事案は教育分野の話だと捉えられがちですが、実際は人材育成と少子化対策の問題に直結します。質の高い教育を提供し、地域社会の持続的な発展と創生に貢献できる人材を育成することが、我々大学の使命でもあります。

山下 各大学が個々で取り組むことももちろん大切ですが、自らの強みや特色を活かしながら大学間の連携をより強固にすることを国も求めています。そこで島根大学と島根県立大学それぞれの人的・物的リソースを掛け合わせ、自大学のみでは成しえない教育活動を行うことになりました。

大谷 私と山下先生は、かつて島根医科大学で切磋琢磨した仲で、これまでも連携関係自体はあったんですよね。島根県立大学の講義に本学医学部の先生が参加したり、私も解剖学の授業を長い間務めさせていただいたりしました。今後さらに連携を強化するにあたり、まずは解決優先度が高い助産師

地域課題解決への第一歩は
出生率を上げること

本学では、「へるん入試」や「クロス教育」など独自の取組を展開しています。自ら課題を見つけて入学し、領域を越えた学びにより多角的な視点やスキルをもって地域課題解決へと導く人材の育成を行う島根大学。今後、島根県の課題を解決して島根創生につなげるため、島根県立大学との連携を強め、大学の枠を超えてさらなる高度人材の輩出を目指しています。まずは人口減少に直結する深刻な助産師不足問題に共に取り組むことなどについて、島根県立大学山下一也学長と大谷学長による対談形式で思いを聞きました。



クロス教育



へるん入試

特集
1

島根大学と島根県立大学

「知の総和」という言葉を耳にする機会が増えました。

これは少子化が急激に進むなかで、国民一人ひとりの能力を向上させる必要があるという考え方。高等教育機関である大学も、各大学が個々で取り組むだけではなく、他の大学と連携・協力することで高度な教育機会を創出することが求められています。



<特集1> 島根大学と島根県立大学01

大学間連携で地方創生を目指す

<特集2> 医学部創立50周年05

SHIMADAI Edge..... 07

島根大学の研究・地域貢献事業紹介

法学部 准教授 宮澤 文雄

国際交流 GO & BEYOND...09

活躍する卒業生.....11

SHIMADAI NEWS..... 13

SUPPORTERS VOICE...15

Let's 広報サポーター... 16

発行終了のお知らせ16

島根大学支援基金より... 17

読者プレゼント..... 17



もくじ



問題に共に取り組みたいと思っています。

山下 これも急に思いついたわけではなく、随分前から連携の構想はあったんですが、なかなか実行に移せていませんでした。

大谷 人口が減少する大きな原因の一つが、子どもが生まれにくいということ。本当に安心して子どもを産み、育てられる環境が整わない限りは少子化問題を根本解決できません。島根県が抱える課題の多くは「人口減少が地域経済の縮小を呼び、地域経済の縮小が人口減少を加速させる」という負のスパイラルから発生したもの。発端である人口減少を抑制するカギは、出生率の向上です。それなのに、助産師が圧倒的に足りていない。医学部附属病院の病院長からも「危機的な状況にあり、中長期的視野を持ちながら早急に対応すべき問題」と意見をもらっています。

山下 都会の助産師教育の現場を視察すると、頻繁にグループディスカッションを行い、医療の現場に必要な不可欠な問題解決能力、コミュニケーション能力、そして観察力を養う環境を作っていることがわかりま

ので、共有したり、強みを分け合ったりしたいですね。本学が近年注力しているのは、インドとの関係強化。インド工科大学のハイデラバード校と学術交流協定を締結し、インド工科大学の学生、そして地元企業とのネットワークを構築する道が拓けました。インドは産学連携によるITや製造業が盛んな巨大国家です。このネットワークを活用して、本学の学生の起業意欲を引き出し、また島根県の企業が海外進出する際のお手伝いができると考えているんです。島根県立大学には、経済学・経営学を学ぶ地域政策学部がありますから、ぜひそこも連携をして、島根県の産業発展に繋げたいです。

連携強化をきっかけに

若者の県外流出を食い止めたい

山下 高度な教育が提供できるようになることで、保護者の皆さんや学生さんに「島根県でも、しっかりと勉強できるんだ」「県外じゃなくて県内に進学させ

す。連携を通じて共に学ぶ人数が増えることでディスカッションの活発化が期待できますし、お互いの講義を受講したり、合同で解剖見学をしたりするなかで、学生には新たな視点を身に付けてほしいです。また近年、助産師は産後のメンタルケアなど、新しく身に付けなければならない知識・能力が増えています。それぞれの大学の先生方の得意分野を活かし、より高度な講義を学生に提供したいですね。両大学で人も物もある程度シェアしながら、島根県の助産師不足に貢献できる人材の輩出を目指しましょう。

新たな在宅医療の形を構築し

医療格差をなくしたい

山下 医療分野での提携は、ほかにも構想しています。現在、山間部や離島は医療アクセスが困難な傾向に陥っており、住民が医療サービスを受受できる機会が減少しています。この地域課題の解決に向け、医療Ma a S（マース）という新たな方法を模索中です。

大谷 医療Ma a Sとは、通信機器や医療機器を搭載した車輛が患者の自宅を訪問し、同乗している看護師が患者をサポート。病院にいる医師とオンラインで繋ぎ、診療を提供するサービスのことですね。

山下 そうです。看護師が直接訪問することで単なる遠隔医療ではなく、患者に寄り添えるシステムを構築できるところが特長。今ちようど出雲市と実証実験中なのですが、これがうまくいけば、中山間地域や海岸線沿いの医療アクセスが困難な場所に住んでいる人も、そのままそこに住み続けられるようになります。遠隔医療によって難病にも対応した高度な先進医療の提供にも取り組んでおられる島根大学医

たい・したい」と思ってもらえたら嬉しいですよ。

両大学の連携強化が、若者の県外流出を防ぐ一翼となることを願っています。島根県が抱えている課題は、学生にとって最高の学びの題材になると思うんです。本学も島根大学も、地域に向き、そして地域の人と協働して課題解決をする実践型教育の機会を豊富に用意していますから、ぜひその中に飛び込んでほしいです。

大谷 県全域に文化が根付き、歴史的に優れたものがたくさんある島根県は、本当に恵まれた環境だと思っています。しかも地域や自治体が、学生の活動に対して非常に協力的。日本中を見渡しても、そんなところはなかなかありません。NHKで朝ドラ「ばけけ」の放送が始まりましたが、小泉八雲さんは1年3ヶ月しか島根県にいなかったのに、人の良さにすっかり魅了されたといえます。当時から、島根県の人々には心の豊かさや、お互いに助け合う精神があったのだでしょう。そしてそれが、今も根付いているのだろーと思います。学生にはぜひ、豊かな自然や文化、歴史の中でしっかりと地に足をつけた、持続可能な生き方について考えを巡らせてほしい。そして島根県が抱える課題解決に貢献してほしいです。

山下 そのためにもまずは我々が、高度な教育を提供しなければなりません。一校では届かないところも、二校で力を合わせれば届くはず。これを機会にさらに高みを目指しましょう！大谷先生、これからもどうぞよろしくお願いいたします。

大谷 こちらこそ、どうぞよろしくお願いいたします。

学部と協力して、新しい在宅医療の形を共に作り上げたいです。

大谷 過疎化が進み、地方に住んでいる人たちは、どんな街の方へ集まりなさいと言われていきますよね。そのことに対する、ひとつの解決策になりそうです。自分のふるさとに住み続けられるのは幸せなことですから、早急に社会実装したいですね。

グローバル化を進めることは

島根県の産業発展にも寄与する

山下 島根県でも外国の方が増えていらつしやるので、多文化共生をしっかりと社会に実装していかねければならないと感じています。本学では地域に根差して世界と繋がる「グローバルな人材」の輩出を全学科で掲げており、多角的な視点で解決策を見出し、地域の発展に貢献できる人材の育成を進めています。そのため、世界各国への留学制度や研修制度が充実。安心・安全・安価なプログラムが揃っているところも自慢です。

大谷 島根県立大学が主催しているアメリカ語学研修に本学の学生も応募できるようになっていて、毎年とても好評なんですよね。

山下 そうなんです。本学の留学・研修制度は、外国語によるコミュニケーション能力向上だけでなく、異文化への理解力を培い、視野を広げることを目的としたプログラムとなっています。島根県に新たな視点やスキルをもたらし、イノベーションを促進する一助を担ってほしいです。

大谷 本学も交換留学や海外研修制度を充実させていますが、島根県立大学とは違うプログラムです

両大学の連絡協議会を定期的開催

島根大学と島根県立大学は、高等教育に関するさまざまな課題や連携事業等について意見交換するため平成17年度より定期的に連絡協議会を開催しています。22回目となる令和7年度の連絡協議会では、助産師課程の連携のほかにも司書教諭講習の実施に向けた課題整理や、教育実習の協力体制の構築などが話題となりました。また、授業時間の調整による相互利用の促進、広報活動における学生の連携、海外研修や地域志向教育の充実に関する意見交換も行われました。両大学は今後も協力を深め、地域の高等教育の発展に寄与していく方針です。



50年のあゆみ

1971年4月1日	島根大学医学部設置推進本部設置
1975年10月1日	島根医科大学設置
1979年4月1日	附属病院設置
1979年10月15日	附属病院診療開始
1982年4月1日	大学院医学研究科 博士課程設置
1986年3月20日	島根医科大学 同窓会発足
1987年3月18日	医の倫理委員会設置
1989年3月2日	MRI-CT装置棟竣工
1989年11月13日	附属病院にて 日本初の生体 肝移植実施



第一回入学式



生体肝移植の様子

1993年8月10日	第三研究棟竣工
1995年2月1日	附属病院が特定機能病院として承認
1999年4月1日	医学部看護学科設置
2001年3月30日	国際交流会館竣工
2001年3月31日	看護学科棟竣工
2001年4月1日	地域医学共同研究センター設置
2003年3月17日	附属病院が病院機能評価の認定交付を受ける
2003年4月1日	大学院医学研究科を大学院医学系研究科に 改称し看護学専攻（修士課程）を設置
2003年10月1日	島根大学と統合（島根大学医学部設置）
2004年4月1日	国立大学法人化（国立大学法人島根大学医学部設置）



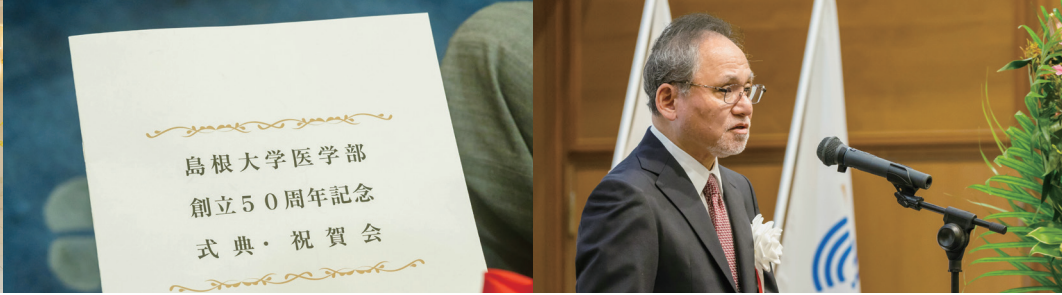
統合時の写真



医の扉（※）

※「医の扉」は、本学が目指すべき「人を見つめる」「地域と世界を見つめる」「未来につなげる」の3つの理念を示す言葉です。この理念は、献体者への感謝と敬意を込めた献体慰霊碑にも刻まれています。

2004年4月1日	医学系研究科医科学専攻（修士課程）を設置
2004年4月1日	看護研究倫理委員会発足
2005年2月1日	看護学科同窓会（さくら会）設立
2006年4月1日	医学部医学科地域枠推薦入学開始
2008年3月14日	附属病院がISO14001取得
2008年2月8日	附属病院が都道府県がん診療拠点病院に指定
2008年12月5日	第三共同研究棟竣工
2009年4月1日	医学部医学科緊急医師確保対策枠推薦入学開始
2010年1月20日	附属病院で患者搬送用ヘリポート運用開始
2011年4月1日	医学部医学科前期日程（県内定着枠）開始
2011年4月1日	医学部看護学科推薦入学（地域枠）開始
2011年6月1日	新病棟（C病棟）竣工
2013年7月30日	みらい棟竣工
2016年4月1日	大学院医学系研究科看護学専攻を博士課程に改組
2017年7月24日	高度外傷センター竣工
2019年3月1日	附属病院が難病診療連携拠点病院、アレルギー 疾患医療拠点病院に指定
2022年12月15日	放射線治療棟竣工
2024年10月1日	医学教育分野別評価認定
2025年10月1日	創立50周年



特集 2

医学部が創立
50周年を迎えました

ごあいさつ

島根大学医学部は昭和50年に島根医科大学として創立され、平成15年に島根大学と統合、平成16年には国立大学法人化を経て、令和7年に創立50周年を迎えました。この節目にあたり、地域の皆様からの長年にわたる温かいご支援に深く感謝申し上げます。また、創立以来、教育・研究・医療の各分野で尽力された教職員の皆様に敬意を表します。

附属病院は「地域医療と先進医療の調和」を理念に掲げ、島根県唯一の大学病院として地域医療の中核を担ってきました。医学科では医の心、知識、技能のバランスを重視した教育を行い、看護学科ではPBL形式（※1）のグループワークを通じてリーダーシップや課題解決力を育成しています。

これまでに医学科4346名、看護学科1466名の卒業生を輩出し、社会に貢献してきました。医師不足対策として、平成18年度から地域枠推薦入試を導入し、定着枠や緊急医師確保枠などを設けることで、県内で従事する医師の着実な増加につなげています。研究面では、腎臓老

50周年記念式典を開催

令和7年9月27日、医学部創立50周年記念式典が開催されました。石原俊治医学部長（式典当時）は、地域と世界をつなぐという理念のもと、教育・研究・診療の三本柱を着実に積み重ねてきた歩みを振り返り、今後も多様性と柔軟性を備えた人材育成に尽力する決意を表明しました。特に、1989年に実施された日本初の生体肝移植や、地域医療教育の先駆的な取り組みなど、地方大学からの先進医療発信の意義が強調されました。

来賓の皆さまからの祝辞では、地域医療への貢献や医師・看護師の育成に対する高い評価と感謝のお言葉をいただきました。文部科学省高等教育局医学教育課長日比謙一郎様からは、文部科学省の統合医療人材養成事業への採択や総合診療医センターでの医師養成など、今後の地域医療の中核を担う人材育成に、島根県知事丸山達也



医学部
創立50周年
Shimane University
Faculty of Medicine
50th Anniversary

化制御を中心としたIKRA（※2）を展開し、高齢化率の高い島根において先進的な研究を推進。大学改革や産学連携を通じて地域産業振興にも寄与しています。令和5年度には「次世代のがんプロフェッショナル養成プラン」にも採択され、広域連携によるがん専門医療人の育成を進めています。

今後も「地域に根ざし、世界に発信する個性輝く大学」として、伝統と精神を継承しながら、教職員一同さらなる発展に向けて努力してまいります。50周年という節目にあたり、皆様のご支援に改めて感謝申し上げます。



国立大学法人
島根大学長
大谷 浩

様からは、先進性と地域性の両立に向けた今後の尽力に對し期待が寄せられました。また、出雲市長飯塚俊之様からは、島根大学医学部の存在が市民の安心と暮らしを支えていると感謝のお言葉をいただき、今後も医療・福祉分野での連携を深めていく意向が示されました。

さらに、島根県知事からは、医学部と附属病院に対し、長年の地域医療への貢献に対する感謝状が贈呈されました。式典の後半には、日本医師会常務理事であり卒業生でもある長島公之様による特別講演、同じく卒業生で金沢医科大学教授の八田稔久様および、一般社団法人Rubyアソシエーション理事長のまつもとゆきひろ様による記念講演が行われました。島根大学医学部の50年の歩みは、地域とともに歩み、未来を切り拓く力強い礎となっており、今後のさらなる発展が期待されます。

島根大学医学部 創立50周年記念募金のご案内

これまで地域医療の発展に貢献してきた医学部は、次の50年に向けて教育環境の充実を図るため、新教育棟の建設を計画しています。新棟には、実習室やグループ討論室などを備え、学生や若手医師が実践力を高める場となります。こうした教育環境の整備に向けてみなさまのご支援をお願いしております。ご寄附は金額にかかわらずありがたく活用させていただきます。詳しいご案内をご希望の方は、特設サイトをご覧ください。事務局までお気軽にお問い合わせください。ご希望に応じて、寄附のご案内資料（申込書付き）の郵送も承っております。



新教育棟「次世代の医療人が育つ、新たな学びの場」
（建設場所・着工時期は未定）

医学部50周年事務局（総務課 企画調査係）
Email: 50th@med.shimane-u.ac.jp
TEL : 0853-20-2018
医学部50周年特設サイト▶



- ※1 PBL 形式…学習者自らが課題を見つけて解決していく中で、解決能力や実践能力を育成する教育手法
- ※2 島根大学医学部統合腎疾患制御研究・開発センター 詳細はこちら



SHIMADAI Edge

尖った研究だから生まれる最先端

「言葉にならない思い」に寄り添う、

「文学の持つ力」を探し続けて



宮澤文雄准教授(中央)と共に活動する町内会のみなさん(撮影地／西田千太郎旧居)

「文学には、言葉にできない思いに寄り添う力がある」。そう語るのは、小泉八雲(ラファディオ・ハーン)の研究を続ける宮澤文雄准教授です。

小泉八雲(以下、八雲)は1850年にギリシャで生まれ、アイルランドで育ち、アメリカで新聞記者や作家として活動した後、1890年に日本を取材するため来日しました。松江での英語教師時代を経て日本文化に深く傾倒。帰化して「小泉八雲」と名乗り、紀行文・随筆・評論・再話と幅広いジャンルで数々の著作を残しました。世界中で今なお広く読まれ続けているのが、「耳なし芳一の話」や「雪女」などを収めた『怪談』(1904年)。

八雲の描く怪談は、単なる恐怖の物語ではなく、死者と生者、過去と現在をつなぐ霊的な文学として愛され続けています。

左)西田千太郎
上)旧居から出てきた
西田家関係史料
(西田家所蔵)

日々、八雲の研究を深める宮澤先生ですが、研究の道を歩み始めたのは、実はまったく別のきっかけでした。高校時代はスポーツ一筋。しかし練習中の大怪我によって夢を断たれます。行き先を見失い、祖母の暮らす山形で農業を手伝う日々の中で「農業は知恵を使う営みだ」と気づいた宮澤先生。そして農業の傍ら読書にのめりこむ体験を経て大学へと入学し、アメリカ文学を専攻するに至ったのです。

大学院時代に東日本大震災を経験したことは、現在の研究へとつながっているといいます。自らも被災したことで、胸の奥に犠牲者や遺族に対する複雑な思いや葛藤が残ったという宮澤先生。その思いを抱えたまま年月が過ぎ、2014年に島根大学に着任します。当初は自身の専門分野に取り組んでいましたが、八雲の作品のひとつ

「阿弥陀寺の比丘尼」を読んだ時に、子を持った母の無念さと嘆きが震災で言葉にできなかった思いと重なり「長く抱えていた感情に、八雲の作品から言葉を与えてもらった気がしました」。こうして「自分の心の奥にあったものを代わりに語ってくれている」と感じた体験が八雲研究を深める原点となりました。

八雲が松江に滞在したのはわずか1年3か月ですが、その時期に妻セツと出会い、日本での生涯を送る基盤を築きました。八雲が日本に来て最初に手がけた紀行文『知られぬ日本の面影』などの著作には当時の松江の街並みや庶民の暮らしが描かれており、今なお松江の町のあちこちでその気配を感じることが出来ます。「現地で作品を読むことで、八雲と自分がつながる感覚があるんです。それは当時の面影を今も残している松江でしかできない研究だと思います」。

さらに研究は、学問の枠を超え、地域に広がっています。八雲の松江時代の同僚で友人だった西田千太郎の旧居では、宮澤先生自ら草むしりから始め、やがて町内会と連携して修復・保存活動に取り組むように。家の中からは、日記や書簡、学習ノートなど、明治から昭和にかけての松江の歴史を一家族の視点から見ることが出来る膨大な資料が見つかりました。発見された資料は、大学で整理・調査が進められ、八雲研究や地域史にとって新たな価値を生み出しています。また、学部基幹プロジェクト

クトを活用して学生と被災地を訪問したり、大学図書館で企画展を開催したり。創立20周年を迎える「島根大学ラファディオ・ハーン研究会」の学生部では、日めくりカレンダーの作成や紙芝居の口演を行うなど、学生とともに八雲を題材にした文学の可能性を探る活動も続けています。

これらの活動について「自分なりの方法を模索しているだけなんです」と穏やかに語る宮澤先生。その奥には「八雲を研究する」ということをきっかけにして、文学と自分との間につながりを見つけてほしい、そしてその中で発見した自分の課題についてじっくり考えてほしいという思いがあります。「文学とは、過去を読むための営みではなく、今を生きる私たちに寄り添い、未来の道を照らす灯です。新たな可能性をひらく力——それが文学の本質なのです」。

現代の文脈で文学を読み解く宮澤先生の研究と活動は、地域や学生たち、誰もが自分の物語と向き合うきっかけを与えてくれます。

新婚の頃のハーンと妻セツ
(西田家所蔵)

GO

To POLAND

留学先

ポーランド／アダムミツキェヴィチ大学
(2025.2～2025.7)

教育学部 特別支援教育専攻

後藤 千聖さん

兵庫県出身。特別支援学校と英語の教員免許を取りたいと考えていたところ、複数の教員免許が取得できる島根大学を知り、入学。大学2年生の時にアメリカで一か月間のホームステイを経験し、もっと英語が話せるようになりたいと思ったことから留学を希望するよう。



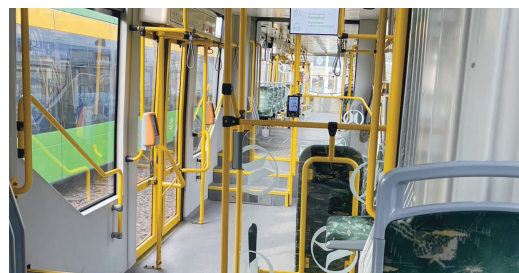
インターナショナルな環境で、子どもたちのために働きたい



大学という整った環境でしっかりと授業が受けられ、また他のプログラムと比べて、留学費用を抑えながら長期間の留学ができる「交換留学」に興味をもった後藤さん。物価が安く安全な国だと感じたこと、ヨーロッパの中心に位置して旅行がしやすいと考えたことから、ポーランドを留学先を選びました。留学するまではオンライン英会話を活用して、自主的に語学力を磨き続けていたそうです。

「留学して一番良かったのは、世界中に友人ができたことです」と後藤さん。共通言語である英語を使ってたくさんの会話を重ねただけでなく、さまざまな国の文化や背景を知ることができました。授業では、英語のみで行うプレゼンテーションに挑戦し、語学力とコミュニケーション力の向上を実感したそうです。

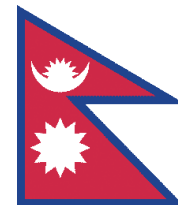
今後はもう一度ポーランドに戻り、大学院に進学するのが目標。そのために今は、英語力をさらに伸ばす努力をしているところです。「将来はインターナショナルな環境で教員として働き、さまざまな国の子どもたちと関わるのが目標です」と、キラキラとした目で話してくれました。



どこへ行くにも利用していたトラム。知らない人から声をかけられて会話を楽しんだり、偶然友人と遭遇したりと、留学中の思い出がたくさん詰まっています。トラム内は清潔で、居心地も良かったそうです。



休日には、ヨーロッパ各国を旅行。これはトルコ、ドイツ、香港、韓国、日本という国際的なグループで、ポーランドを旅行したときの写真です。非常に楽しく「どの国出身かなんて関係ない」と強く感じたそう。



BEYOND

自然科学研究科創成理工学専攻

アチャリヤ アシスさん

ネパールにあるトリブバン大学の学部および修士課程で、エンジニアリング地質学を専攻。2020年に本学大学院自然科学研究科環境システム科学専攻に入学し、博士前期課程を修了した後、2022年から博士後期課程に進学。在学中は、学業面と経済面の両面で支援を受けられる文部科学省の奨学金を活用し、研究に専念することができた。

From NEPAL

出身国

ネパール
(2020.10～2025.9 島根大学に留学)



母国と日本の学生を繋ぎ、より安全な社会の構築に貢献したい。

ネパールは、地震、地滑り、洪水、斜面崩壊などの災害が頻繁に発生する山岳国。母国でエンジニアリング地質学を学んでいたアシスさんは、自然災害研究の分野で世界的にも高い評価を得ている日本で、さらに学びを深めたいと留学を決意。地球科学分野における優れた教育、経験豊富な教員、そして充実した研究施設が揃っていることが決め手となり、島根大学大学院を留学先に選びました。

入学後は、地滑りと地下水モニタリングについて研究。「高度な研究機会と先端的な研究施設に恵まれ、新しい学びを得ながら自分の視野を広げることができました。また国際的な人的ネットワークを築けたことで、個人的な成長にも繋がりました」と振り返ります。

「今後は、日本で得た知識とスキルを活用しながら土砂災害リスク軽減に関する研究を推進し、より安全な社会の構築に貢献したい」と意気込むアシスさん。将来的には日本の大学で教員として働き、ネパールと日本の学生が災害研究に関する知識と経験を共有する機会を創出したいと考えているそうです。



博士号授与式に出席するために、家族が訪日。大切な学術的節目を家族とともに日本で迎えることができたのは、アシスさんの留学生活の中で最も思い出深く、意義あるものに。



こちらは、修士課程1年生の頃の写真。斜面モニタリングのために深さ50mのボーリング孔を掘削し、その中に複数の光ファイバーを設置。実地での作業経験は、今後の研究に大いに役立ちそうとのこと。

GRADUATE OF SHIMANE UNIVERSITY

利益を“と考える農業者の方に、提案を受け入れてもらうことは簡単なことではありませんが、農業者に技術を体験してもらって効果を実感し、これなら続けられると思ってもらえたらと思っています”。

専門高校から島根大学に進学し、学びを深めるなかで普及指導員を目指し現職についた岩谷さん。普及指導員の仕事は、農業者の方々の協力が必要不可欠です。「同級生と出会ったときに仕事の話になって『作業してくれる人みんなが動いてくれるから、現場を管理する立場の自分は仕事ができる』と言っていて、まさに普及指導活動もよく似ています。主役の農業者の方々が私の提案に納得して試行してくれるので成果が出て、それが農業者にとつてのプラスにつながります」。農業者への理解と尊敬、自らの学びと経験から生まれる信頼関係を大切に、俯瞰的視点で事業を遂行しています。



揉まれて学ぶ、挑戦する力をつける
大学の地域人材育成コース

島根大学在学中に岩谷さんに大きな影響を与えたのが「地域人材育成コース」の存在です。地域人材育成コースでは、専門性を生かしながら地域と協働し、課題解決に取り組める人材を育成することを目的としたもので、岩谷さんはこのコースでの学びの中で今まで出会ってこなかった経験や恩師に刺激を受けたと言います。「新しいものを作りだすとき、ゼロから考えないといけないと思っていた私にとって『組み合わせを変えるだけでも新しいものになるんだよ』と恩師からいただいた言葉は衝撃的でした。小さな挑戦ができるようになったり、発想の転換もうまくできるようになったりと自分の中での転機となりました。また、コースの活動で学外に出ると、学生であっても周りからは専門人として見られます。だから、わかりません。は通じないの、授業にも自然と力が入りました。そこで研究や体験を繰り返していくうちにノウハウも身に付いたと思います」。

在学中の学びで、岩谷さんの一番の収穫はコミュニケーション力。学外に出ていろいろな人と関わり活動する中で、聞く、伝えるということが積極的に行ってきた経験は今でも財産となっています。「農業者のほとんどが年上の方で、経験も豊富です。いろいろな年齢、所属の方々と数多く接してきたおかげで、社会人一年目から現場で活動できたので、学生時代の経験が生きていると感じます」。今でもまず聞く、そして伝えるを大切に技術の普及活動に従事しています。

目に見える結果とやりがい

農業者への支援に加え、農協や市町村等の関係機関とのやりとりも仕事の一つです。各機関の調整役となることは関わる人が多くなる分大変ですが、収量の増加や品質の向上といった目に見える結果が出ると達成感を得られるそうです。

一方、農業者にとっては自身の生計が関わってくることもあり、提案する際はより丁寧な説明が必要となります。相手の立場に立ち、誠実で一貫性のある岩谷さんの行動は高く評価されています。「感謝されたり、『岩谷くんに対応してほしい』と言ってもらえたりすることはやりがいにつながっています」。その屈託のない笑顔で話す姿は世代を超えて農業者から愛され、確かな信頼関係を築きながら、島根の農業発展を支える若き人材として更なる活躍が期待されます。

活躍する卒業生



島根県西部農林水産振興センター 岩谷 凌さん

島根大学 生物資源科学部・農林生産学科2023年3月卒業



食の未来を守る農業に向き合う

現場のリアルを知り
省力化技術の導入による
持続可能な農業の実現へ

『島根県西部農林水産振興センター（県央事務所）』の邑智農業部に勤務して農業指導に携わっている岩谷さんは、近年の気候変動や農業者の高齢化といった現場の課題を解決し、農業の持続可能性を高めるため、省力化技術の導入に注力しています。特に水田への施肥作業は収量に直結しますが、重い機械を背負って水田に入ることもあり、農業者にとって負担となっています。そこで、灌漑水を利用して水田に肥料を流し込む追肥法など、新たな手法の提案を通じて島根の農業発展を支える存在となれるよう働いています。「研究は手間や時間、費用を要します。」少ないコスト・労力で最大の



島根県西部農林水産
振興センター（県央事務所）

島根県邑智郡川本町大字川本265-3

https://www.pref.shimane.lg.jp/seibu_norin/

島根県西部地域における農林水産分野の振興を担う機関。
情報提供・相談窓口として、農業・畜産業の技術指導および
必要な実証・研修の実施、就農者の育成等を行う。

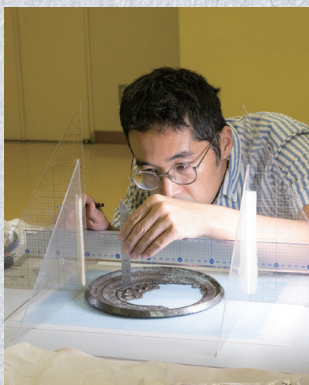




2025年9月30日に島根大学と学校法人桐蔭学園は、教育、研究、地域貢献の分野で連携し、教育の質向上や人材育成を目的とした協定を締結しました。締結式では桐蔭学園の溝上慎一理事長が「幼稚園から高校までの学びを大学へつなげ、社会で活躍する人材育成の大きなきっかけにしたい」と述べました。また、大谷学長は「地方創生や国際社会を支える人材育成において重要な連携であり、都会と地方の良さを相互に経験できる幅広い連携を展開したい」と語りました。今後、桐蔭学園との共同プロジェクトや高大連携事業を通じて、地域の将来を支える優秀な人材育成を共に進めます。

島根大学と学校法人桐蔭学園が包括的連携協定を締結

NEWS 03



法文学部社会文化学科の岩本崇准教授が第37回濱田青陵賞を受賞しました。この賞は、考古学の振興に寄与する顕著な業績を評価するもので、岩本准教授は「三角縁神獣鏡を軸とする古墳編年の構築と地域史の実証的研究」により受賞されました。古墳時代の三角縁神獣鏡に関する徹底した実物観察と資料化を基に、新たな古墳時代史を描き出すとともに、山陰地域の研究や国際的な視点での地域史評価にも取り組んでいます。また、本学で取り組んでいる青銅器文化や金工技術研究の国際的拠点形成においても主導的な役割を果たしており、今後の研究成果が期待されています。授賞式は9月21日に岸和田市で開催されました。

法文学部岩本崇准教授が第37回濱田青陵賞を受賞

NEWS 04



島根大学は、学生起業のベンチャー企業「株式会社ストラテジーAI」(代表取締役 中尾香達)に大学発ベンチャーの称号を付与し、報道発表を行いました。同社は人間科学部3年生の中尾氏が長期インターンシップや海外渡航経験を基に起業した企業で、生成AI活用やDX推進のための人材育成研修やツール導入コンサルティングを主な業務としています。島根大学は規則改正により、研究成果や特許に基づかない学生起業も認定可能とし、同社を初の大学発ベンチャーとして認定しました。中尾氏は「山陰地域を生成AIの先進地域となるよう活動を推進する」と抱負を語りました。今後の活躍が期待されます。

「株式会社ストラテジーAI」を大学発ベンチャーとして認定

NEWS 05



2025年5月に結成され、本学のSDGsユニットとしても認定されている学生団体「島大すみれ食堂」が、第75回浜風祭にてブース出展し、「紙アカリウム」やスタンプリイなどSDGsについて考える企画を行いました。来場した方々に海のゴミ問題などを知っていただけるよう、ブース内は海をテーマにした装飾で溢れており、また「紙アカリウム」は来場した子どもたちが描いた絵が映像の中を泳ぎ回る企画で、楽しみながらSDGsについて身近に感じる機会となりました。代表の佐藤一喜さん(総合理工学部1年)は、「今後は新たに子ども食堂を設立したい」と熱く夢を語ってくれました。

SDGsユニット「島大すみれ食堂」が浜風祭に初参加！

NEWS 06



※本企画は、リコージャパン株式会社松江営業所の皆様にご協力いただきました。

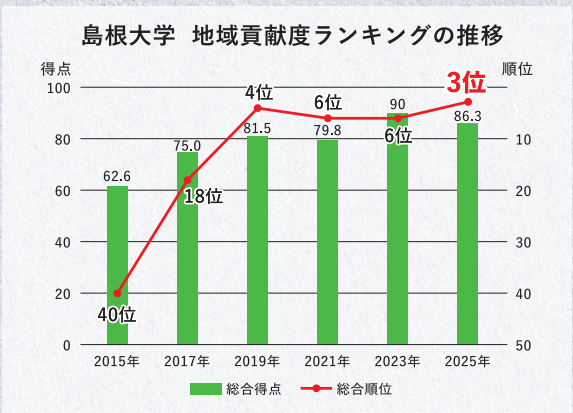
NEWS 01



島根大学が全国第3位にランクイン！ 地域貢献度調査で高評価

2025年11月3日に発表された「大学の地域貢献度調査」において、島根大学は全国第3位(国立大学では1位)という快挙を達成しました。この調査は、日本経済新聞社が全国777の国公私立大学を対象に地域社会への貢献度を測るもので、497大学からの回答をもとに、「大学の組織・制度」「学生・住民」「企業・行政」「経営・防災」の4分野の得点を合計し、総合ランキングが決定されます。本学は前回調査でも総合6位と高評価を受けていましたが、今回初めてトップ3にランクインし、地域に根ざした大学としての取組が全国的に認められた形となりました。

これまで本学では、地域で活躍する人材を育成する「地域人材育成コース」の設置をはじめ、地域の課題と大学の研究シーズを結びつけて解決を目指す「じげおこしプロジェクト」、地域貢献意欲の高い学生等を対象とした「へるん入試」の導入など、地域との連携を重視した教育・研究活動を展開してきました。さらに今年度からは、地域や国際社会とのパートナーシップ構築を目指す



「SDGsユニット認定制度」を新設し、学生による持続可能な社会づくりへの取組も始まっています。過去の調査結果を振り返ると、2015年には40位だった本学が、この10年で3位まで躍進したことは、地域の皆様と共に歩んできた成果の表れです。今後、島根大学は、「地域に根ざし、地域社会から世界に発信する個性輝く大学」を目指し、地域とともに課題解決に取り組んでまいります。

NEWS 02



島根大学SDGsユニット認定制度を新設

島根大学では、持続可能な社会の構築に向けた新たな取り組みとして、令和7年度より「SDGsユニット認定制度」を創設しました。この制度は、学生や教職員が主体となってSDGsの達成に資する活動を行う団体や個人を「SDGsユニット」として大学が公式に認定するものです。

今年度はまず学生主体ユニットが始動し、地域スポーツの支援・普及やフードバンク支援、環境保全活動、文化継承

など、幅広い分野で活動する15のユニットが認定されました。各ユニットはそれぞれ多様なテーマに取り組んでおり、活動内容に対し高い評価を受けた団体には、大学から支援金が支給される仕組みも整えています。

8月8日にはSDGsユニット認定式が開催され、各ユニットの代表者に大谷浩学長より認定証が授与されました。学長からは「認定されたことを誇りに思い、積極的に活動を広げてほしい」との激励の言葉が贈られました。

さらに、9月26日には学長記者会見が行われ、制度の概要や認定ユニットの活動内容が紹介されました。代表ユニットとして出席した「陸上競技部」「学生FBI」の学生たちは、地域貢献への思いや今後の展望を語り、制度の意義が広く伝えられました。

島根大学では、今後もこの制度を通じて学生や教職員の自主的な社会貢献活動を支援し、地域との連携を深めながら、持続可能な未来の実現に向けた取り組みを推進していきます。



Let's 学生広報サポーター

8月15日から17日にかけての3日間、島根大学出雲キャンパスにて全国医学生ゼミナール(以下、医ゼミ)が開催されました。医ゼミは、医療系学生によって企画・運営されており、全国各地の学生と職種の垣根を超えた学習・交流を行っています。その第68回目の医ゼミの主管校を20年ぶり3回目となる島根大学が務めました。『『生き方』を支える地域医療～島根で探す私たちの未来～』をテーマに、講演会や学生発表などさまざまな企画が行われました。今回の医ゼミで全国実行委員長を務めた山本陽南さん(医学科5年)にお話を伺いました。



(取材:学生広報サポーター S、Y)

出雲キャンパスで全国医学生ゼミナールを開催



山本陽南さん



※医ゼミサークルとは、全国の各大学において医ゼミに興味を持つ学生で構成されているサークルのことで、普段から学習や交流を行っています。

島根大学では一度、医ゼミサークル(※)が途絶えた過去がありますが、2020年に現在の医ゼミサークル「おろびよん」が発足されたそうです。今回の島根開催を契機に、おろびよんの活動が今後一層盛り上がりつつあることが期待できます。

今回のテーマには、「地域医療先進県である島根県で得た学びを、日本の未来の医療に活かしてほしい」というおろびよんメンバーの願いが込められています。医ゼミは医学生のみならずさまざまな医療系学生が集う場です。そのような場だからこそ、地域医療とそれを支える多職種連携について、あらゆる視点から考えを深めることができたそうです。山本さん自身も「医ゼミを通して身に付けた力を病院実習や今後の医療の現場でも生かしていきたい」と話してくれました。

そして最後に山本さんは「大学では学べない学びを得られる医ゼミの場が大好きです」と語ってくれました。今後の医ゼミ、そして山本さんの今後に期待が高まります。

山本さんは一年生のころから医ゼミの運営に関わっており、医ゼミのように全国の学生と関わることでしか成長できない部分を磨いてくれました。山本さんからお話を聞いたことで、これから企画の運営や他大学とも関わるができる機会があれば積極的に参加したいと思うようになりました。

SUPPORTERS VOICE

新たな価値を一緒につくる、島根大学の共創パートナー

株式会社キグチテクニクス
専務取締役 武久浩之さん



島根の地から世界の航空機産業を支える

安来市に本社を置く株式会社キグチテクニクスは、航空機に使われる金属材料や複合材料主に炭素繊維強化プラスチック(※)の試験・評価を専門とする企業です。航空機産業は世界でもっとも厳しい技術要求が課される分野。その安全を陰で支えるのがこの試験・評価です。

島根大学との包括的連携協定を締結したのは、同社が新しい金属材料の研究を進めていた時期。積み上げた試験技術に大学の最先端の知見を組み合わせることで研究を加速させる狙いがあったといいます。「キグチテクニクス構造材料共同研究講座」としてスタートした研究は、現在「次世代たたらプロジェクト(※)」の一つとして次世代たたら協創センター(NEXTA)に引き継がれ、事業化を目指して最終段階に入ったところです。同社と島根大学では、ほかに2つの共同研究プロジェクトを行っており、合計で3つの共同研究を進めています。

島根大学との連携を強化する同社には、もう一人と人のつながりを感じる物語があります。実は武久さん、東北大学での学生時代に現・材料エネルギー学部の三原学部長から直接指導を受けたという間柄。「材料エネルギー学部が新設され、三原学部長が就任したことで偶然にも再会を果たしたので」と笑顔で語ります。同社では現在、部品の壊さずに内部の欠陥を調べる「非破壊検査」を行う新工場をソフトビジネスパークに建設中。完成すれば、世

界水準の航空機部品の非破壊検査を行う拠点となります。「非破壊検査には超音波技術を用いるのですが、三原学部長は超音波研究の第一人者。非破壊検査でさらに連携を深めていきたいですね」。かつての師弟が30年以上の年月を経て、縁の地島根で再会し、今度は企業と大学という立場で航空機の安全を守るために欠かせない共同研究や人材育成に挑む。この不思議な縁に大きなシナジーを期待していると武久さんは微笑みます。

また同社では、島根大学の学生に研究現場や最新設備に触れてほしいと企業見学会への参加やインターンシップの受け入れを積極的に行っています。同社にはこれまでも島根大学の卒業生が数多く入社し、難易度の高い航空機材料試験の分野で着実に力を発揮していることもあり「連携がさらに深化することで、島根から世界に通用する技術と人材が育つ基盤はさらに強固になっていくはず」と話す武久さん。師弟の縁を再び結んだ島根の地で、世界とつながる研究と事業が続いていきます。



疲労試験機内部



島根大学より新卒入社した従業員が材料試験を実施している様子

※2018年採択 内閣府「地方大学・地域産業創生交付金事業」

産学官連携はオープンイノベーション推進本部へ！

連絡先 オープンイノベーション推進本部
<https://www.openinnov.shimane-u.ac.jp/>

オープンイノベーション推進本部は、産学官連携の推進を図り学内外のネットワークを強化し、産学官連携の共同研究を通じてその研究成果を社会に還元し、地域産業の振興やイノベーションを創出する皆様の真の共創パートナーを目指します。



オープンイノベーション推進本部長 松本真悟



信頼と実績・高品位ソフトウェア開発



希望に満ちた
未来ある若人を応援します！
島大出身の社長・OB・OGが数名在籍！



Everything begins with one will.
株式会社ソフト開発

一緒に働く仲間 募集中！

詳しくはこちら

東京町田本社 042-795-7613
広島オフィス 082-850-0877



木造建築に欠かせない 合板の 製造・販売 で国内販売シェア約30%!!





人と木をむすぶ
日新グループ

松江・浜田・境港から
徳島、三重に広がり
そして世界に向かう
日本一の合板メーカーを
目指しています。

WEBサイトはこちら
https://www.nisshin.gr.jp

島根大学卒業生も多数活躍中！



ディーゼルエンジン用部品／産業機械用部品
鋳物素材～加工完成・組立一貫生産

テクノロジーと信頼で『夢・希望・未来』を創出する

ヤンマーキャステクノ株式会社

(本社・松江事業部) 千690-0025 島根県松江市八幡町960番地 ☎0852-37-1355
(甲賀事業部・鍛造技術センター) 千620-3233 滋賀県湖南市柑子袋360番地 ☎0748-72-0800
https://www.yanmar.com/jp/about/company/ycat/

～よりよい環境づくりを目指して～



株式会社
コスモ建設コンサルタント

土木設計・測量・地質調査・補償コンサルタント
島根県出雲市斐川町莊原 2226-1
https://cosmoc.jp/
☎0853-72-1171

TEIJIN

帝人コードレ株式会社

島根から世界へ、未来につなぐ技術力

人工皮革・フィルムの開発 製造 販売

島根工場 大田市長久町長久1446
大阪本社 大阪市北区中之島3-2-4



先進の IT 技術で
未来を拓く。

エンタープライズ系・組込み系のソフトウェア受託開発を
メインに、研究開発にも積極的に取り組んでいます。

日本システム開発株式会社 本社：名古屋 事業所：東京、松江
千690-0003 松江市朝日町 480 番地 8 松江 SKY ビル 3F
TEL:0852-28-7175 FAX:0852-28-7233 HP: https://www.nskint.co.jp/

うまいもんなら、なんでもマルイ

24時間
営業

マルイ黒田店

スタッフ募集中！
(正社員・パート・アルバイト)



https://www.maruilife.co.jp

一おしたへ、未来へ

地域創造企業

私達は、ものづくり支援で、未来の扉を開く
あなたのベストパートナーとして一緒に輝きます。

建設コンサルタント・補償コンサルタント・測量・地盤調査・地盤改良工事
株式会社 昭和測量設計事務所

【本 社】島根県益田市高津四丁目14番6号 TEL (0856) 23-6728
【浜 田 事 務 所】島根県浜田市治和町832-11 TEL (0855) 25-7300
【松江オフィス】島根県松江市東津田町1888-11-102 TEL (0852) 61-8312



告 募 集

広報しまいだいでは、企業・団体様等からの
広告を募集します。

島根大学企画広報課
TEL：0852-32-6603
gad-koho@office.shimane-u.ac.jp

Think regional
act regional

地域を「共想」し、地域を「共創」する。



セーラー広告株式会社 https://www.saylor.co.jp/
岡山本社／岡山県岡山市北区東古松南町6番地29
TEL (086) 231-2301

島根大学生協同組合は
島大生の住生活をサポートしています！

★毎年約700人の方が生協でお部屋を決めています。
★管理物件を募集しています。ご相談ください。

学生向管理物件 登録部屋数 約1,600室



島根大学生協同組合
〒690-8504 島根県松江市西川津町1060 Tel0852-20-0881
https://www.shimadai.coop/

この看板が
目印です！
管理

島根大学支援基金より

島根大学総務課支援基金担当
TEL 0852-32-6015
Mail sienkk@office.shimane-u.ac.jp
https://www.fund.shimane-u.ac.jp/

島根大学支援基金では、皆さまからいただいたご寄附を地域や世界で活躍する人材育成のために活用させていただいております。
何卒ご支援を賜りますようお願い申し上げます。
支援基金についての詳細は支援基金HPをご覧ください。上記お問い合わせ先へ支援基金パンフレットをご請求ください。

島根大学支援基金 寄附者一覧

法人からのご寄附 (単回)

出雲医療生活協同組合 出雲ガス株式会社 一般財団法人恵雲会 一般社団法人出雲医師会 一般社団法人島根県医師会 一般社団法人島根大学医学部医師会
医療法人IH1播磨病院 医療法人いきいき、クリニック 医療法人江田クリニック 医療法人嘉村医院 医療法人相川耳鼻咽喉科医院 医療法人おつ内科クリニック
医療法人郷原医院 医療法人コスモ会出雲コスモ病院 医療法人後藤クリニック 医療法人財団公仁会鹿島病院 医療法人慈誠会山根病院 医療法人社団芦沢医院
医療法人社団泉胃腸科医院 医療法人社団雪雲会まもと内科クリニック 医療法人社団耕雲堂小林病院 医療法人社団悠伸会うめがえ内科クリニック
医療法人博愛会(社団)別府中央病院 医療法人姫野クリニック 医療法人みもりキッズ・ファミリークリニック 株式会社山陰合同銀行
株式会社日本海技術コンサルタンツ 協同組合島根県職工会 公益財団法人ヘルスサイエンスセンター島根 島根県済生会江津総合病院 島根大学医学部後援会
島根大学医学部卓球部OB会 社会医療法人祥和会 社会医療法人仁寿会 中国電力株式会社 斐川生協病院 益田赤十字病院 有限会社みはし薬局
わたなべこどもレディースクリニック

個人からのご寄附 (単回)

青柳和仁 青山晃治 赤根 敦 秋山恭彦 吾郷雄二 浅井 茂 足立経一 飯野修二 石田 淳 石田 徹 石原俊治 石原達有 石光亮太郎
泉 和秀 一瀬邦弘 伊藤泰行 稻生田妙子 井上圭亮 伊原早紀 今岡いずみ 岩倉秀雅 岩田 淳 宇田川潤 内尾祐司 宇野将史 浦上慎司
江口 透 大谷 浩 大西梨乃 大原睦子 岡田大司 岡田祐介 神井 浩 沖永 聡 小笹俊哉 岸 浩史 小野田恵介 垣内寿昭 片岡 諒 金山富美
金子篤志 熊澤 修 倉田さつき 小池尚史 小池真生子 河野美江 児島 晃 後藤郁則 岸 隆 岸 和子 岸 隆 木島康貴 木村成里 葛尾浩司
楠堂 強 近藤揚輔 齋藤雄平 酒井雅義 坂本英明 佐藤秀一 佐藤利昭 佐藤 博 佐野啓介 佐野千晶 佐野千晶 塩谷雅英 地阪光生
近藤正宏 清水友理 塩部邦憲 杉浦智子 杉浦弘明 杉村和朗 図師真弓 鈴木賢二 須田憲治 諏訪勝保 仙田直之 千星 聡 高田明子
柴田直昭 瀧田寿彦 田草雄一 田口雅一 竹下正弘 竹谷 健 谷口栄作 谷口 隆 谷口 隆 長田愉以子 中野知子 永森忠嗣 永山雅子
富田洋平 内藤 篤 直良浩司 長井 篤 中井隆志 中島高広 中島匡博 永瀬睦己 長田裕久 羽根田紀幸 林 広樹 原 正彦
名取瑞樹 西 健 西尾祐二 西川梅雄 西田 朗 野澤雅和 平川正人 平田愛子 松井 寛 福井栄二郎 福田一雄 福庭暢彦 藤谷昌司 藤由崇之
原田菊夫 原田 守 引田拓史 日高匡章 尾藤 誠 細川幸宏 堀耕太郎 森 英明 守屋真示 森山賢治 山田義貴 山根裕幸 山根雄幸 山本寛斉 山本弘正
舟塚雅英 古河真澄 北條宣政 星井達彦 細川幸宏 堀耕太郎 森 英明 守屋真示 森山賢治 山田義貴 山根裕幸 山根雄幸 山本寛斉 山本弘正
三登陽子 三原 契 三原崇文 宮崎 亨 村川洋子 森 英明 守屋真示 森山賢治 山田義貴 山根裕幸 山根雄幸 山本寛斉 山本弘正
山上信生 山口清次 山崎 修 山崎征爾 山崎誠太 山下秀治 山下美江子 山田義貴 山根裕幸 山根雄幸 山本寛斉 山本弘正
横井昌治 横山智子 吉廻 毅 吉田 浩 吉田理佳 若栗重人 渡部広明 鰐淵 博

※(単回)令和7年4月1日～令和7年8月31日に5千円以上のご寄附をいただいた皆さま(50音順・敬称略) ※(継続)令和7年度に5千円以上のご寄附をいただいた皆さまのご芳名は、令和8年4月以降に島根大学支援基金HPに掲載させていただきます。 ※ご寄附をいただいた際に「氏名の公表を承諾しない」とされた方及び記載のなかった方は掲載していません。
※掲載スペースの都合上、法人の代表者様のご芳名は省略させていただきます。

編集後記

読者の声

あなたのご意見・感想をお聞かせください。

投稿のお願い「広報しまいだい」は島根大学と地域の方々との相互理解を大きな目的としています。島根大学から地域に情報を発信してほしいこと、地域の方々からの島根大学に関する話題、島根大学に対する要望、その他ご意見、質問などをお気軽にお寄せください。ご投稿をお待ちしています。

ご意見いただいた皆さまの中から抽選で5名様に島大農場で収穫・加工した「季節のジャム2瓶」をプレゼントします。 ※当選者のお知らせは発送を持って代えさせていただきます。 ※応募締切／令和8年2月27日(金)必着

投稿先
〒690-8504 松江市西川津町 1060
島根大学 企画広報課
TEL 0852-32-6603 FAX 0852-32-6630
https://forms.office.com/r/SqdMRd5uPE
Mail gad-koho@office.shimane-u.ac.jp

岐阜県高山市40代女性／在学生の普段の様子やどんな先生に習っているのか、どんなことをしているのがもっと分かったなあと思います。
徳島県美馬市10代／初めて読みましたがとても興味が湧きました。島根大学に進学したいという気持ちがあるため真剣に読みました。
読んでからは島根大学に行きたい！という気持ちがあります。強くくなりました。
島根県隠岐郡70代女性／表紙いいですね!!10月から始まる朝ドラに先がけていい感じですね。
島根県隠岐郡60代女性／松江キャンパス生物資源科学部での100日間咲き続けるソツジの新品種の開発しかも花色変化を伴うなんてすばらしい、みてみたい!
大阪府富田林市60代男性／大学のPR誌を手にしてびっくりかなり充実していました。がんばってくださいね。大学がぐっと近い存在になりました。